## 第2回 作文コンクール **小のふれあい大賞** 入賞作品集



主催 公益社団法人 福岡県医師会 共催 福岡県、福岡県教育委員会、西日本新聞社

後 援 九州厚生局、福岡市、北九州市、久留米市、飯塚市、大牟田市、行橋市、福岡市教育委員会、 北九州市教育委員会、朝日新聞社、産経新聞社、毎日新聞社、読売新聞社(順不同)

## 目 次

募集要項	選考委員	表彰式の様子	小学生の部 優秀賞	小学生の部 優秀賞	小学生の部 優秀賞	小学生の部 最優秀賞	中高生の部 優秀賞	中高生の部 優秀賞	中高生の部最優秀賞	一般の部 優秀 賞	一般の部 優 秀 賞	一般の部最優秀賞	入賞作品紹介	主催者あいさつ	表彰式
			中村 桃子 さん	淵 綾乃 さん	真鍋 健太郎 さん	坂戸 航汰 さん	末益 愛菜 さん	東 優美 さん	清水 駿さん	七熊 直美 さん	山野 以知子 さん	森 千恵子 さん			
H4	21	20	19	18	17	16	14	12	10	8	6	4		3	2

## 表彰式



(平成28年1月23日(土) 福岡市・イムズホール)

<ul><li>長谷川 彰</li><li>西日本新聞社生活特報部長</li></ul>	● 一般の部 優秀賞	青水 駿さん●中高生の部最優秀賞	東優美さん	未益 愛菜 さん	松田・峻一良□列目
●小学生の部 優秀賞	坂戸 航汰 さん●小学生の部 最優秀賞	山野 以知子 さん●1般の部優秀賞	◆一般の部最優秀賞	中村 桃子 さん中村 桃子 さん	真鍋 健太郎 さん 真鍋 健太郎 さん

## 主催者あいさつ



公益社団法人 福岡県医師会 松田 峻一良

医療・介護に関する体験記を募集するものです。 をあて、 これは、 作文コンクー 目的としております。 することで、県民の方々や医療関係者の方々 にまつわる経験、 のまわりの医療体験」事業を開始いたしました。 の医療に対する意識を高めていただくことを 寄せられた作品の中から、 福 「信頼関係」という医療の原点にスポット 岡 ?県医師。 病気になった時に感じたことや介護 医療従事者と患者さん、その家族と 会では昨年 ル「心のふれあ 医療従事者とのふれあいなど、 度より福 優秀作品を発表 い大賞-岡県医 わたし 師

高生の部・小学生の部から最優秀賞、 応募をいただき、 ただきました。 の合計一〇名の方々を選出し、 本冊子では、受賞者の方の作品を紹 今年度は、昨年度を上回る一 選考の結果、 表彰させてい 九〇点ものご 般の部 優秀賞 介させ 中

幸いです。

# 最 憂

般の部

した。

両耳とも、真珠性中耳炎という

難病とのことです。

学病院を紹介され、恐る恐る受診しま 音が聞こえませんでした。耳鼻科で大



福岡市 千恵子(67歳)

「ぼちぼち先生」

気と闘える 意思の疎通さえうまくいけば一緒に病 《医師と患者は異なる立場にいるが、 これはある方の著書を読んで、感じ

私はこのことを実感したのです。 たことでした。そして4年前の暮れ、 ある日、水道の蛇口から出ている水

> 不安で、心ここにあらずという状態の 訪れるからです。この間はいろいろな 教授を頼りに他県からも大勢の患者が 2カ月ほど待たなくてはなりません。 と気遣ってくれました。 毎日でした。家族や友人たちが、 えました。手術日は決まったのですが まで健康を過信してきた罰のように思 れるばかりでした。この恐怖心は、今 て初めての手術です。不安で涙がこぼ ている自分がいました。何しろ生まれ 「早く、手術をした方がいいでしょう」 教授の説明を、人ごとのように聞 何か

者は、皆緊張していることが伝わって です。待合室で周りの人を見ると、ど でした。私だけではなく病院に来る患 の人も無言で肩に力が入っているよう ドキドキで臨んだ術前検査日のこと

> とき、遠くの壁に一枚のポスターを見 ながら、順番を待っています。そんな きました。電光掲示板とにらめっこし に安らぎを覚え、何度も読み返しまし つけたのです。そっと近づいた私は心

動看護》 《折れそうな心まで支えてみせる 感

た。

に変化し始めました。医療に携わって が伝わってきました。私の落ち込んで す。支えてくださる人たちがいること ようと頑張っておられることを感じた いる大勢の方たちが、患者を元気にし いた心が、手術を頑張ろうという思い ともに、この言葉が書かれていたので からです。 笑顔いっぱいの看護師さんの写真と

ちぼち元気になりましょう」。 車椅子を押しながら先生が、「手術は と看護師さんが迎えに来てくれました。 何のこともありませんよ。あとは、 いよいよ手術の朝、 病室まで主治医 ●一般の部

して、 と手術が終わっており、時間 ドアの奥へと進んだのです。 てくれていたのだと感謝しました。 た顔を見て、心配しながら長時間待っ 信じられません。ですが夫の疲れ切っ は笑顔で看護師さんとお別れをして、 いることを感じたのです。 医学が目覚ましく進歩し続けて の経過が 目覚める そ

とても落ち着かせてくれました。

私

です。 先生でした。何日かして耳を覆ってい 生方のとても忙しい日常が分かったの 不思議に思って様子を見ていると、 消灯近くだったりと、さまざまでした。 が始まります。それは早朝だったり、 たネットが取れると、 主治医は、笑顔を絶やさない気さくな さまざまな日常を目にしました。 と闘う患者、 それから1カ月余りの入院中、 医師、 看護師さんたちの 毎日の付け替え 私の 病気 · 先

付け替えをしましょう 先生が、毎日病室まで迎えに来てく

> て、「大丈夫ですか」と声を掛けます。 それでも、一日も欠かさずに付け替え 研究会や学生への指導、 られるときもありました。 ですよ」。 よ。耳も頑張っているね。立派、 それでも「どんどん良くなっています 耳の治療はとても激痛を伴うのです。 処置室ではベッドの寝起きに手を貸し のための迎えに来てくださったのです。 出張や学会への出席などと多忙でした。 術日には、 れ ます。外来診察日には、 長引いて消灯近く走って来 他の病院への その間 早朝に。 立派 品にも 手

復しますよ。 りましょう」。 手に付き合うと免疫力が上がり早く回 病気は焦ると治りが悪い。しかし、上 と言うと、「もう少しの辛抱ですよ。 みも和らぎました。早く家に帰りたい 先生の明るい声を聞いていると、 まあ、 ぼちぼち元気にな 痛

私は心の中で、彼のことを「ぼちぼち 先生が優しく力づけてくれたのです。

> 私たち医師の元気のもとですからね。 可を伝えに来られました。 とが、人生の宝物だったということを。 先生」と呼ぶようになり、心から頼り おめでとう!」。 と、「患者さんが笑顔で退院することが 今まで元気な日常を積み重ねてきたこ くの方に励まされ教えられたのです。 にしました。 ある日、忙しい中、 入院中は、 教授自ら退院許 病院で働く多 お礼を言う

です。 また大急ぎで、 外来へと戻られたの

うな足音が聞こえてくるようです。 耳を澄ますと、 張っておられる大勢の人々がいます。 患者の体とそして心をも支えようと頑 だった私の心は、 ました。今も病院では命と向き合い、 感動看護は本当でした。 私と一緒に病気と闘ってくださって、 ぼちぼち先生の忙しそ すっかり元気になり 折れ そう

護を受けながら、

自宅療養していた 最後は、緩和ケア

為にH病院に転院し一ヶ月半、訪問看

び抗癌治療等で二ヶ月半、 急搬送され入院、緊急手術、

リハビリの 放射線及 子がおかしくなった母は、S病院に救



# 憂 般の部



福岡市

# お命と握手の話

眠ったまま静かに旅立ちました。享年 く元気だった母が、緩和ケア病院で、 二〇一二年十月三十日。 あの若々し

脳腫瘍発覚から十一ヶ月足らずの事

二〇一一年十二月九日。夕食時の様

山野 以知子 (59歳) と思っています。 ても印象的で一生忘れる事はできない 院の脳外科医で主治医のⅠ先生は、と の方々にお世話になりました。 に四ヶ月と本当にたくさんの医療関係 三ヶ月目に再発し、 中でも、最初にお世話になったS病

安心感を感じるようになり、Ⅰ先生に に時間はかかりませんでした。 すべてをお任せしたい! を伺ううちに、先生の熱意と不思議な に若い先生で?と不安でしたが、説明 初面談の時は、失礼ながら、こんな そう思うの

頂くようになりました。母は、 族ともお会いする度に必ず握手をして お伝えし、母の回診の度、又、私共家 う思いで始めた握手の習慣がある事を 家族一人一人とも日々、一期一会とい 説明終了後に、先生に、我が家では、 初めか

> ٤ らったとよ。しかも、若くてイケメン。」 がもの凄くいい先生で、命を助けても 見舞にいらした方々にも「私の主治医 らこのI先生が大のお気に入りで、 いつも自慢をしていました。

と涙を流しながら、両手でしっかり握 のお陰。 らんかったとよ。これも、すべて先生 まさか誕生日が迎えられるとは思っと た誕生日の回診の時には、「先生、 又、手術から六週間後、 感謝、 感謝です。」 病院で迎え 私

ですよ。」 うね。ところで僕は明日が誕生日なん Hさん自身の頑張りの力でもあるとで すよ。これからも、一緒に頑張りましょ 「それは、ヨカッた。でも、これは、 手。

母は、満面の笑みで気持ちだけは、すっ 生、私の方が一日だけお姉さんね。」と、 大爆笑となりました。 かり乙女になり私達をびっくりさせ、 I 先生の思いがけない話に「あら先

山場を迎えていて、髪は抜け、 この頃、 放射線と抗癌治療

を与えてくれるのでした。
に母の生きる力となり、私達にも希望
大好きなI先生の回診と握手は、確実
取れない一番辛そうな時期でしたが、

ました。れる時に「お命」という言葉を使われれる時に「お命」という言葉を使われるて、このI先生は、面談で説明さ

しました。も印象的で、ある時、その事をお尋ね私には、このお命という言葉がとて

されてすると先生は、意外にもキョトンと

た。」と言われました。摘されるまで、気がつきませんでし少し考えて「あ、言ってますね。指「えっ僕、お命って言ってますか?」

なります。」 生となら一緒に頑張れる!と、励みにという言葉を使われると、母がとてもという言葉を使われると、母がとても

ま、これからも一緒に頑張りましょ畏敬を感じているからでしょうか?「それは、恐縮です。命というものに

て頂く為に、毎月お会いしました。も1先生とは、特殊な抗癌剤を処方しう。」としっかり握手。S病院退院後

救命医を目指された事も。事だったと伺いました。しかも、救急けたお母様が、幸い元気に回復されたきっかけが中学生の時に余命宣言を受きっかけが中学生の時に余命宣言を受

「救急救命だけは、医者次第なんです。「救急救命だけは、医者次第なんです。

ていました。

淡々とした話し方でしたが、その目

大事な握手を忘れていますよ。 先生が、 お礼を言って退室しかけた時にふいに めてこのⅠ先生で本当に良かったと、 志をお持ちだったという事を知り、 しかも、 れていて、そこに医者の原点があり、 先生ご自身が、 お命を助けたいという強い意 両手を差し出し 患者の家族を体 握 手、 さ、 -験さ 改

> が最後になってしまいました。 どもⅠ先生とお会いしたのは、 た事に胸が熱くなり、その時 いた握手をしっかり覚えていて下さっ 生のお話に聞き入ってしまい、 た来月お会いしましょう。」 いつもに増して熱く感じました。 私 の握手は、 忘れ は、 け 0) 先 H n 7

ています。 会いして感謝の けられたという事でしょうか? を感じています。 結果とは裏腹に、 ました。 の信頼関係を築けた事で、 かなり壮絶なものでしたが、Ⅰ先生と か又少し貫禄のつかれた?Ⅰ先生に 最後の日 日一日増えていく様な感覚に変わり 母 の闘病生活は、 そして、その増える喜びが、 への恐怖を和らげる事となり、 握手が交せたらと願 悲しみよりも安堵感 納得のいく医療を受 絶望から始まり、 母のお命が 7) お 0

本当にありがとうございました。

## 憂 般の部



福岡市 直美 (46歳) 七熊

「ニコニコ先生」

足は、 になり、 がる娘の気持ちとは裏腹に、その形の 余程おいしい肌なのか二才の夏から手 私のひとり娘は虫に刺されてしまう か 夏の間はずっと腫れ上がったまま わ 刺された跡でびっしりだった。 虫よけスプレーをしてても、 い絵のバンソウコウを貼りた

> た。 貼る一円玉サイズの味も素っ気もない も分からないまま娘は六才になってい 夏になると水玉を繰り返しては、 は跡形もなくなってしまう。そして又、 ながら水玉模様を見ているようだった。 は、ひしめく虫刺され跡に貼ると、さ せん薬局より箱単位で分けてもらって 医療用肌色テープだった。それを処方 ても大丈夫なものと言えば注射の後に 水玉の数は秋が来ると減って、冬に 病名

した。 が判かればと思い、 い皮膚科をみつけたので、せめて病名 少し遠方だが、まだ行ったことのな 行ってみることに

けてこられた。 入念さで手足を見ると、優しく話し掛 て下さった。鑑定でもするかのような 配の先生がまずは笑顔で娘の頭を撫で 診療室に入ると、柔和なお顔のご年

「かゆいかな?」

子供へ話すように尋ねられた 緊張気味に娘がうなずくと、

くなっちゃうかな?」

「これは夏だけかな?

冬になると良

のもので貼れるものは無かった。 まま湿疹が広がる敏感肌なので、

貼 市 販

さった。 たと不満をぶちまける私に、先生はう 病名すら判からないのに劇薬を出され 切ったように話し始めてしまっていた。 もいたことや、 て、使用をためらう私に怒り出す医師 にも言えなかった、 さに驚きながらも、 ん、うんと頷きながら話を聞いて下 る罪悪感と無力感で追い詰められてい その言葉を聞いた途端、 何ヶ所も病院巡りをす いきさつをセキを 私はそれまで誰れ 見抜いた凄

たことや、 も勿論だったが、症状を言い当てられ つつ聞いていた。 どれを取っても初めてで私は茫然とし 「これは小児ストロフルスと言ってね…」 先生の丁寧な説明もあっけに取られ 終始笑顔で診察されたのも、 病名が判かったこと

てしまっていた。

入っていないし、来年一年生になれば あなたが心配する副作用の強いものは 塗ってごらんと言われた。 先生は、 院で調合した薬を出すから それには

尻目に、娘がうれしそうな顔で話しか 驚いた余韻を引きずったままの私を めいた事も言われた。

症状も落ち着いて治るからねと、

予言

けてきた。

ニコさんだったね。」 おじいちゃんやさしかったね。 ニコ

さんとおぼしき人の診察だったので、 に、お礼を言いたくて、再び病院へ行っ 娘 塗り薬は、 ところが、若先生と呼ばれる息子 の回復ぶりを見てもらうのを口実 効果てきめんだった。

前回 先生だと聞き、 先代のおじいちゃん先生が時々診察す おじいちゃん先生に、 ることはあっても、 [の事を切り出してみた。 恐縮しながらも先代の 今はほとんどが若 お礼をお伝え願 すると、

> 帰って行った。 どく落ち込み、その日はすごすごと 直接お礼が言えなかったことに内心ひ "伝えます"と言っては下さったが、 えないかと申し出てみた。 若先生は

先生の言う通り、 に気がつけば、 ほど元気になっていた。 頻繁に病院へ行っていたのが見違える それから更に四年が過ぎ、皮膚科を その半年後、 一年生は皆勤賞だった。 娘は小学一年生になり、 水玉もひどくならず おじいちゃん

えていたようで、もしかすると又、代 探す母が私に、 診の日があるかもと、 を聞いてきた。褒めちぎる私の話を覚 確認の電話を入れてみた。 おじいちゃん先生の事 私は久々に病院

と心配 た。 くは涙が止まらなかった。 をあげて私が泣き出すと、 先代は…亡くなったのですよ、昨年。」 思いもしない返事に絶句してしまっ 電話を切ってから、 し飛んで来てくれても、 ワァワァと声 娘は何事か しばら

> 思っていた自分の怠慢さも悔しかった。 医に感謝していると、御本人に伝えた 嬉しかったが、母親の心をも治した名 感肌ではあるが水玉模様になることは、 歳になろうとしている。 かった。それがいつか言えるだろうと うことも叶わない。 はもうできない。 あの時、 もう一度会いたかった。でも、 幼かった娘がもうすぐ二十 会って直接お礼を言 娘が治ったことも 相変わらず敏 それ

晴らしい先生でした。 い 患者の内の一組だったのかもしれませ ん。でも私にとっては忘れられな や、忘れることなど到底できない素 おじいちゃん先生にとっては数多い もうない。

をお借りして、 しょうか? 御本人に言えなかったお礼をこの場 伝えてもよろしいで

時は本当にありがとうございました。 れしく思う患者がここにいます。 先生に診てもらえたことをとてもう

# 最 夏

中高生の部

ていた。



福岡市・高校2年 駿

清水 (17歳)

まった。 ていないまま、 もそもガンカとは何だ。 が発せられ、 手術をしないといけません」 眼窩 そう言われた。突然手術という単語 (がんか) に腫瘍があります。 頭での理解が遅れた。そ 私は入院が決まってし 何も理解でき

> 間続いた。 に行き、言われた通りに病院を回り、 は、 検査をする。 きさほどの腫瘍ができていた。入院中 眼窩というスペースに、 病名は「右眼窩内腫瘍」。目を包む 訳も分からず言われた通りの場所 検査入院の期間は、 目玉と同じ大 2週

変わったことが少しでもあると、 するイメージも変わっていった。 うな機械ばかりの部屋。足が動かなく くない?」と、言葉を掛けてくださっ に様子を見に来て、「大丈夫?」「きつ 8 い…。数え出せば切りがないが、 なった方との会話。友達や家族の見舞 あった。映像でしか見たこともないよ そして、その2週間で私の医者に対 かけがえのない経験だった。 その2週間では貴重な体験が多く すぐ 私に どれ

療を施すだけ。そんな人たちだと思っ とは何も考えず、ただ診断結果から治 私は医者が嫌いだった。こちらのこ た。 して、医師という存在に対して、 るとい 時には雑談もしたりして、そうす つの間にか私は、その先生に対

感を抱くようになっていた。

かった。 私はもう、 つものように優しい声で言ってくれた。 あっという間だった。手術台の上に乗 うとう手術の日を迎えた。ここまで、 ると先生が「安心してください」とい 2週間の検査入院を終えて、私はと その言葉を信じるしかな

といつの間にか、7時間の手術が終 の気持ちを伝えていた。 りがとうございます」と、何度も感謝 き私は、「ありがとうございます、あ がった私の目を見詰めながら、 わっていた。 た。そして、一瞬だけまばたきをする しましたよ」と言ってくれた。そのと 麻酔を入れられると体がしびれ始め 執刀医の先生が腫 「成功 れ上

というわけではなかった。手術直後、 手術が終わったからとい って後は楽

はいつも、 き気止めを体に直接入れてもらうがそ 声で私を励ましてくれた てくださり、「大丈夫だよ」と優しい ち回った。しかし、そのようなときに れでも治まらず、ベッドの上でのたう 態で何度も吐いた。 ひどい吐き気に襲われ、 私の隣には医師の先生がい 病室の中でも、 空の胃袋の状 吐

りと決まった。 経験を通して自分の将来の夢がはっき 月だった。そして何より、 自分の成長を感じることもできた1カ 退院の日となった。その1カ月は楽し いことばかりではなかったが、その分 そして、約1カ月の入院生活が過ぎ、 入院という

医師になりたい」

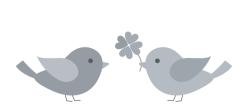
い

ちの、 機会がほとんどなく、 私は入院するまで、医師の方と接する 入院をして感じたのは、 メージで医者を嫌っていた。 自然とそう思うようになっていた。 病気を治したいという熱い気持 何となくのイ 医 師の先生た しかし、

> 院をした。 いと思った。 ように将来、 ちだった。そして同時に、 私は新しい夢を抱いて退 苦しむ患者さんを助けた 自分も同 じ

踏まえて思うことは、 信頼をなくしてしまう。 問題をよく目にする。 して信用されることはない この犠牲的な精神が医師には絶対必要 分の命を踏み台とすることも辞さな に、このようなことが書かれてい 天野篤医師の著書「熱く生きる」の中 かだと思う。私の尊敬する医師の一人、 いかにミスをなくし、身を粉にできる があると、患者はどうしても医師 や投薬の間違い。これらのような問題 「『患者さんの命を救うためなら、 ا 自分がもし医師になることができた 最近、ニュースや本で、医療関係 自己犠牲の精神がないと、 極端と思われるかもしれないが、 信頼を得るには、 患者の取り違え 自分の体験も 医師 た。 自 の 0

> には、 今の自分の行動を考えて、 うな医師になりたい。そのためにまず、 信頼を得ることはできるだろうか。 れるような覚悟を付けていこうと思う。 わっていないからだ。医師になるから 言うような覚悟が、自分にはまだ備 りたいとは思っていても、 の自分には、まずできない。 患者の方から信頼を得られるよ 天野先生が 信頼を得ら 医師にな



として、果たして私は患者の方からの

## 中高生の部 憂



筑後市・中学2年 優美 (13歳) 東

# 「心に寄りそう

はなく、 に言っても、大きな病気の手術で 手術を受けました。 かし私にとっては初めての手術 私 は去年の夏休みに、耳と足 形成的な簡単な手術です。 「手術」と一言 0

> 緊張がありました。 だっ たので、頭の片すみに不安や

説明。 な笑顔で、 不安を一切感じさせないかのよう 強ばるばかりです。 した。それでも淡々と進む手術 いよ明日なのか。」と緊張が増しま れていて、それを見た瞬間、「いよ いる先生の手には、 来られました。 ている形成外科の先生が、 ちで済むものだなと、 要するとのことで、 入院生活初日の昼、 一師によると、 今まで笑っていた私の 明るく振るまって 五日間 割と短い日に すると先生が 同意書が握 思いました。 私の受診し の入院 病室に 顔 は 0

た。 来られました。 が楽になって、 と、言われました。 しばらくして麻酔科の先生が 緊張もゆるみまし 実は私が一番不安 私 は 気に気

> だったのは、 わかりやすかったのですが、 に丁寧に答えて下さって、すごく 先生に質問しました。 説明を聞きました。 さめた後の副作用などいろいろな ら麻酔薬を入れた後に手から肩 チューブを入れることや、 麻 は取り除けませんでした。 つのる一方で、心配なことを全て かけて痛みが走ること、 酔 をする 時 手術でなく麻酔です。 に、 やはり不安は 気管 先生は的確 麻酔から 点滴 0) 中 不安 に か

道中、 替え、 をして下さいました。 びに来られました。手術室までの く感じるもので、看護師さん 待ち時間でも、 ました。 方から点滴を始めて、手術着に 不安なまま迎えた手術当日、 病室で時間まで待機してい 看護師さんが何気な いつもなら長いと感じる この日ば ただ会話を かりは早 い会話 が 朝

「大丈夫だよ。」

## 優秀賞 ――「心に寄りそう医療」 ●中高生の部

ま

Ũ

た。

それ

から私

が麻酔におち

した。 たい足取りも軽くなった気がしま するだけでも、 心が軽くなって 重

7)

手術室に着いて、

いざ入ろうと

ました。 術をこれからすることを思わせな が明るく待っておら 看護師さん、 いような雰囲気で、 するとそこには、 私の執刀をする先生 麻 その場は 酔科の先生や れました。 和 手 Z

生が、 すあ 題に 会話 く軽 台に るの め た手つきで着々と作業を進 Ó 看 たり 麻酔という重要な作業を熟な しつつも、 したり、 が見えました。 横になりました。 「護師さんの指示のもと、 い気持ちになるよう、 私と会話している間 が プ П 患者の趣味などを話 なんだなと感心 命を落とさな 患者がなるべ 麻 醉 笑顔 に 慣 8) 科 手術 て 0) た 先 で n

> るまでずっと話しかけて下さって ました。

ずさわる人になりたいと思わ 謝します。 下さった先生や看護師さん達に感 できました。そんな医 しさが必要不可決だと思うことが ました。人の生きる場には人の優 なさっているんだと、 そい、そして心に寄りそう医療 療をするだけでなく、 看護師さんは、 このような経験をして、 ただ病気や傷の 患者と寄 感銘を受け .の現場にた 医 せて 師 を 治 ŋ P



# 中高生の部 憂



朝倉市・中学2年 末益 愛菜 (13歳)

# 笑顔や明るさから 生まれること」

には、 んと、 その時 の骨折したことがあります。 私は一度、 お世 リハビリテーションの方た カ月半ほど入院しました。 話になった、 自転車からこけて足 看護師 病院

> ます。 す。 だけでなく、コミュニケーション 看護師さんとは、 ておかないといけません。でも、 体についていろんなことを分かっ そのように、看護をする技術や、 の人は、 しかありませんでした。だいたい 主治医の手伝いなどといった印象 ちについて、 入院している人の看護をする人、 まずは、 私にとって看護師さんとは、 しかし、私が思ったのは、 そんな印象をもつと思い 看護師さんについてで 話します。 看護をすること

> > からです。

間など、今日も良い天気ね!!など あちゃんたちにも、 と、なぐさめてくれました。 くなったことがあったからです。 なぐさめられて、 なぜなら、私も、 をとることも大切だと思いました。 一人でつらい夜に、 不安や心配が 看護師さんから 朝の起床 大丈夫!!など の時 おば な

くなりました。

リハビリの時でも、

だんだん話せるようになり、

楽

自己紹介からでした。それから、

した。 るくなるし、 コミュニケーションで、 思いました。 と小さなことでも声をか 私はそれを見て、 なぜなら、 楽しくなると思った そうい いいい 病院 けてい も明 、なと う ま

張してたし、いやだなぁと思って むかえに来てくれました。 かわからなかったので、とても緊 した。なので、どんなことをする 骨折をして、リハビリも初めてで を動かすのを手伝ったりしている 体が動かなくならないように、体 どんな印象をもたれていますか? いました。初めてのリハビリの時 人だと思いますね。 たちについてです。みなさんは 次は、 リハビリテー 私も、 シ 3 最, 初めて ン の方 は

## ●中高生の部 優秀賞 ――「笑顔や明るさから生まれること」

そし えにきてくれました。 話 うちに、 が ちんと時 まえのことかもし ことがあります。 うれしさ。 6 とてもうれ さなことでしたが、 n くなりました。 つも時 出せる。 i わ だん動いてきたんだという実感 かったです。 **(**) たからです。 間 間 だんだん足が リハビリがだんだん楽し あと一つすごいと思った これ Co を守ってい しかったです。 っ が IJ たりに れ それは、 楽しみでした。 ハビリの方とも そうしていく ない 私にとっては 病室 それも、 たことです。 動いてくる けど、 足 に あたり が む う き だ か

> 毎日話、 ます。 ショ 要です。 笑顔 た。 の医 リテ さんの人を助けていってもらい と明るさ、そしてコミュ の方は、 リテー 思います。 多くの人が助けられていると思い た時など、 です。 からも、 生 ĺ その方たちは、 療従事者の方とふれあえま 活 でした。 ンも大切だと思いました。 ショ で、 元気もたくさんもらえたと シ してくれます。 でもそれとは (,) 3 話しかけてくれ 笑顔と明 ろんな技術や 看護師さんや、 ン ン 看護師さんや、 そして、 の方など医療従 の方など、 みんな明るく るさで、 別 す その笑顔で、 んちが 知識 に、 たくさん ニケ リハ リハ るし、 事者 た 笑顔 も 必 ピ た ピ

時でも、

前よりできるように

な か

つ す

たら

ほ

めてくれました。

そんな小

てく

n

まし

た。

自分で足を動

色々

· な 工

夫

が

ありま

し

た。

足

を

動

院

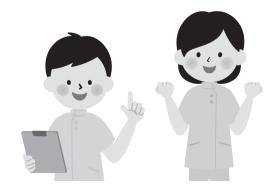
か

てもらう時

も、

様々な話

をし



のように私は、

カ月半

0

病

V

n

## 入賞作品



さんと出会いました。

そのころ、激しい運動をしてはいけな

# 最

ルには、

一回も入ったことがありません。

が楽しそうに学習している小学校のプー ようにできなくなりました。夏にみんな いと分かり、ぼくの大好きな体育が思う



那珂川町・小学5年 航汰 (11歳) 坂戸

ました。

ういうくやしい思いをお医者さんに話し

ぼくは、検査で病院に行ったとき、そ

ま法の言葉

院したりとしているうちに、そのお医者 院に行ったり検査したり、 明るい気持ちに変えてくれました。 そのお医者さんは、 あることが分かりました。 ぼくには大好きなお医者さんがいます。 1年生のころ、ぼくの頭の中に爆弾が ぼくの暗い気持ちを そのために入 いろいろな病

た。

だよ。 これから出会う人の力になるためのもの だって君の個性だよ」と言ってくれまし とできないことは誰にでもある。病気 たとき、きっと役に立つよ。できること いことを精いっぱいやろう。今の経験は、 だよ。今できること、自分にしかできな きないことや、人と違うことができるん あるけれど、病気のおかげで他の人がで 話を聞いてくれて 病気のせいでできないことももちろん お医者さんは、うなずきながらぼくの 同じように悩んでいる人と出会っ

しまったんだろう。病気がなければ、 ぼくはそれまで「なんで病気になって

> 自分にできることはないか、考えたり探 う言ってくれたとき、自分にももっと何 かけていました。でも、 に」と思って、自分のことが嫌いになり したりしてみようと思いました。 かできそうな気がしてきました。そして、 んなともっといろいろなことができるの お医者さんがそ

めようと思います。 あっても、毎日笑顔で過ごすことから始 まずは、病気のことで落ち込むことが

だとぼくは思います。 るからです。 ときのぼくみたいに、元気になったりす んはすごいと思います。 病気の人の気持ちを元気にするお医者さ でいても、ま法の言葉を聞いたら、この お医者さんの言葉はま法みたいなもの 人の病気を治すだけでなく どんなに落ち込ん

います。 の力にもなれるような人になりたいと思 と探して、困っている人や悩んでいる人 ぼくも自分のできることをもっともっ

## 入賞作品



福岡市・小学5年 健太郎(11歳)

# ぼくと口唇裂

年の夏休み、母が初めてぼくの産まれ て産まれてきました。 た時の事を話してくれました。 分の一成人式も終りました。 中にいる時に、唇がうまくつながら ぼくは口唇裂というしょう害を持っ ぼくは11才になりました。この前二 お母さんのお腹 そして今

> 院につれて行かれ、 なかったそうです。 「しばらく入院することになるかも。」 産まれた次の日、ぼくは、 大きな病

て泣いたのかな? 泣きしたらしいです。ぼくもうれしく うれしくて、ぼくをだいたら力強く大 と言ってもどってきたそうです。母は 「この子は入院しなくてもKです。」

たさが身にしみました。

たり、 の日、 結果、 ぼくは、ミルクをたっぷりのみ先生も つは無事に終り、 す。そして、四~五時間の長い手じゅ して手じゅつ室へ入って行ったそうで て育ててくれました。その母の努力の がのめないぼくに、 向けて体重をふやすために、母は母乳 それからは、四ヶ月後の手じゅつに 丸っまると太ったぼくは、 看護師さんにだかれてニコニコ スポイドでのませたりと工夫し 意識をとりもどした ほ乳ビンを改造し 手術

でも手じゅつは一回だけでなく、 四 び

っくりしたそうです。

先生が神様に見えました。 楽になり、 から、飲んで良いよと言われた時は、 きすぎることが一番つらいです。 ないです。でもそれ以上にのどがかわ るといってもじゅつ後のいたみは半ぱ ることが出来ました。スムーズに出来 経験者だということを思うと気もちが 四回目の時は、 五、十才と計四回しました。でも二、三、 スムーズに手じゅつをうけ もう自分は手じゅつの 水のありが

心配したそうですが、数時間後

健康であることがどんなに幸せなこと ぼくはこの経験で病院の方の大切さを かも分かりました。 にとても感しゃしています。そして、 デに、ずっとつきそってくれた父、母 を治してくれた現代の医学と先生のウ 感じました。そして、ぼくの「口唇裂 今、ぼくは、とてもとても元気です。

がとう先生! 大切にしていきたいと思います。 いろとおしえてくれてありがとうお母 まだまだ通院は続くけど、この体を いろいろと治してくれてあり いろ

## 入賞作 品

からだ。

元気づけることが心の薬になると思う り打ちひしがれている患者をはげまし、

だと思う。

なぜか、

それは重

い病気を

わずらったことを知

りショックのあま



那珂川町・小学5年 淵 綾乃 (11歳)

# 人とのコミュニ ケーション

たり、 切なのは患者とのコミュニケーション である。 しんさつをしたり入院の手伝いなどを したりするのは医者 病院。 しんさつを受けたりする場所。 病院とは、 医者や看護師にとって一番大 病気の人が入院し (医師) や看護師

> たりもした。 せてくれたり、 りもした。 たまに実際につった魚を見せてくれた 日毎日病室に来るたびに話してくれた。 の話をしんさつの時にしてくれた。 医者は、 先の医者と看護師の話だ。その病院 から家の近くの小さな病院へと移った ない。」と言われていた。 いた時のことだ。医者には「もう治ら 私のおじいちゃんがガンで入院して おじいちゃんのしゅ味のつり 看護師はおじいちゃんにみ 家族の話を聞いてくれ 大きな病院 毎 0

ため、 的 まりこんでい つきっきりで看病した。 ちゃんがいつどうなるのかわからない けでなくおばあちゃんもだ。 にも精神的にもつかれきっていた。 助けてもらったのはおじいちゃんだ おばあちゃんはおじいちゃんに た。 おばあちゃんは肉体 夜には毎日と おじい

> しい言葉や世間話でした。 0) お ばあちゃんの心の支えは看護師たち 「休んでいいですよ。」 というやさ

とらないといけない。 ばならないし、 患者の体調についての心配もしなけれ 変なときでもほほえんでいた。 守られたおかげで、おじいちゃんは大 なったが、やさしい医者や看護師に見 けられる医者や看護師はすごいと思う。 者だけでなく患者の家族までも元気づ 結局、 おじいちゃんは コミュニケーションも ばガンで 私は患 なく

ていきたいと思う。 ろんな人とコミュニケーションをとっ と思う。私はこの作文をきっかけにい うな小さなことだけで信らいが深まる その人に声をかけてみて、なにかでき 思う。例えば、元気のない人がいれば 場でもコミュニケーションは大切だと てるようにできるかぎりやる。 そうなことがあればその人のやくにた 私は、 病院だけではなく、学校や職 このよ

## 入賞作

# 小学生の部



筑後市・小学6年 中村 桃子 (12歳)

# 弟のけがと お医者さん」

そして、前はいとこ、後ろには弟が乗っ まった。ゆっくり、ぬけるかどうか引 ている時に、弟の足がタイヤにはさ 乗りをして遊んでいる時のことだった。 がした。 私と弟といとこ三人で自転車で二人 私が三年生のころ一年生の弟が、 け

> て。 いてみたが、 「お母さんに言ってくるからまって ぬけなかった。 だか 5

た。弟は泣きだした。 どくむけて、とてもひどいけがになっ を引っぱった。足はぬけたが、皮がひ いるのがこわくなって、 かし、ずっとタイヤに足がはさまって と言って、家の中に入っていった。し 弟が無理に足

母さんといとことおじいちゃんがとび 家の中から、弟の泣き声を聞いてお

「だいじょうぶ?」

私は、 お母さんと弟だけしんさつ室へいった。 約をしてまっていると名前が呼ばれた。 きたのか、もっと弟は泣き出した。予 んと私と弟はすぐに病院へいった。 ちゃんは、そのまま家にいて、お母さ 何も答えなかった。 様子で聞いた。だが、弟は泣いていて とお母さんとおじいちゃんがあわてた 病院の中に入ると、こわさが増して いとことおじい

ほっとした様子でしんさつ室からでて とそわそわしながら待っていた。 「どうなるのかな。」 しばらくすると、弟とお母さんが

> と私が聞いたら、 たかったことなどを話してくれた。 しかったことや、こわかったことやい でちりょうのことやお医者さんがやさ きた。弟はすぐにとても安心した様子 「どうだった?」 「まわりに注射を何本もさして、

と弟が言った。でも、 でぬった。」

た。 の後の注射はそんなにいたくなか 「一本目の注射はいたかったけど、そ つ

٤ 言っていた。そしてちりょうがおわる と言った。 など、やさしく声をかけてくれたと んしてね。大じょうぶだよ。」 「少しいたいかもしれないけど、 お医者さんが、 が

ま

言っていた。 とてもうれしかったし心強かったと といろんな言葉で、ほめてくれたから んしたね。強いね。」 「えらかったね。すごい ね。 よく が ま

にすごいと思った。 すごいと思っていたけど、 それを聞いて、 今までお医者さんは 今まで以上

## 表彰式の様子

(平成28年1月23日(土) 福岡市・イムズホール)





一般の部・最優秀賞 森 千恵子 さん



一般の部・優秀賞 山野 以知子 さん



一般の部・優秀賞 七熊 直美 さん



中高生の部・最優秀賞 清水 駿 さん



中高生の部・優秀賞 東 優美 さん



中高生の部・優秀賞 末益 愛菜 さん



小学生の部・最優秀賞 坂戸 航汰 さん



小学生の部・優秀賞 真鍋 健太郎 さん



小学生の部・優秀賞 淵 綾乃 さん



小学生の部・優秀賞 中村 桃子 さん

## 選考委員

福岡県教育委員会 丸山 晴幹

西日本新聞社生活特報部長 長谷川 彰

<sup>有識者</sup> 林田 スマ

福岡県医師会広報委員会委員長 高嶋 雅樹

福岡県医師会副会長 蓮澤 浩明

福岡県医師会理事 馬郡 良英

福岡県医師会理事 山家 滋

福岡県医師会理事 半井 都枝子



## 募集要項

- ●「信頼関係」という医療の原点にスポットをあて病気になった時に感じたことや介護に まつわる経験、医療従事者とのふれあいなど、医療・介護に関わる体験記を募集します。
- ●400字詰め原稿用紙 3 枚~ 5 枚以内 (1,200~2,000字) 鉛筆 (B、2B) /ボールペン/万年筆/パソコン/ワープロのうち、いずれかを用いて、 濃くはっきり書く。

※パソコン・ワープロの場合、1ページ400字(20字×20行)。

- ●表紙をつけて、部門、題名、〒住所、氏名(ふりがな)、年齢(生年月日)、性別、所属、 電話番号、FAX番号を明記して下さい。
- ●福岡県内の学校に在籍する児童生徒、および一般県民 ※医師を除く
- ●自作の未発表作品に限り、盗作、二重投稿は固くお断りします。 ※応募作品について盗作等による著作権侵害の争いが生じても、主催者は責任を負いません。
- ●応募作品は返却いたしません。
- ●入選作品の著作権、出版権は主催者に帰属します。 ※そのため主催者、後援者がインターネット上で開いているページや、雑誌、テレビ、ラジオ、 書籍、教材などに利用されることがあります。
- ■【一般の部】最優秀賞 1名 (副賞:現金10万円)

優秀賞 若干名(副賞:現金3万円)

【中高生の部】 最優秀賞 1名 (副賞:図書カード5万円)

優秀賞 若干名(副賞:図書カード2万円)

【小学生の部】 最優秀賞 1名 (副賞:図書カード3万円)

優秀賞 若干名(副賞:図書カード1万円)

【問い合わせ】福岡県医師会総務課 作文コンクール係 (TEL 092-431-4564)

主催:公益社団法人福岡県医師会

共催:福岡県、福岡県教育委員会、西日本新聞社

後援:九州厚生局、福岡市、北九州市、久留米市、飯塚市、大牟田市、行橋市、福岡市教育委員会、 北九州市教育委員会、朝日新聞社、産経新聞社、毎日新聞社、読売新聞社(順不同)



## 平成28年3月発行 公益社団法人福岡県医師会

〒812-8551 福岡県福岡市博多区博多駅南2-9-30 電話:092-431-4564 FAX:092-411-6858